

三井のリフォーム住生活研究所 所長 西田 恭子

沈黙が心地よい夫婦

夫婦のありようはいろいろである。先日、あるご夫婦とお話しをしていたら、奥様が「沈黙が心地よい夫婦でありたい」とおっしゃった。その言葉がとても印象に残った。

「沈黙」という言葉からの私の連想は遠藤周作の小説『沈黙』で、島原の乱の隠れキリシタンを題材に神の存在を考えるなんとも重たいテーマのだが、その方はリタイア一カ月のご主人との関係をお話していた。

リタイア後、当然ながら夫婦の会話は増える。今までとは違い、一日の中で家にいる時間が増え、三食共にすることも多い。食事だけではなく、テレビを見る習慣も変わる。夫は朝起きると同時にテレビをつけ、妻は夫が会社に出かけると同時にテレビを消していたのだが、これからはテレビを見る時間も増え、感想ぐらいは会話することになる。夫にとっては、一日に話す量が変わったことよりも、話す相手が妻に限られたことへの変化は大変なことだろう。

妻にとってもどのようなだろうか？ もともと女性は

概して話し好きである。さらにアイデア豊富だったり、頭の回転がよかったりする女性の話はなかなか面白い。夫は今まで気づかなかった妻の魅力を再認識することもあり、「それで？ それでどうしたの？」と話す相手として妻を求め続ける。夫にとっては今まで全く関心がなかった世界のことを、好むと好まざるに関わらず知る必



要があり、また新鮮でもある。妻は「はい！ 今日はこちらまで」と切り上げることもあるようだが、どうせ話すなら、建設的なことで共通の話題がある方がいいだろうと思う。

リタイアを機に、家のリフォームをされる方が多い。二人の共通の話題として、我が家はどうするかは格好のテーマだろう。

先の夫婦も家のメンテナンス

ンスを考え、話し合っていた。今までの現役時代の仕事のやり方で事を進めようと思うご主人は、比較検討資料を作り結論は一つと、段取りよくさっさと片付けようとする。

かたや過程を楽しみたい奥様は、折角お金を出すのだから、心の中でふらふら迷う時間さえ大切にしたい。妻が結論を出さないのは決して反対しているからではないのに、反対していると思った夫は説得のために言葉を多く使いはじめる。

こんなすれ違いの思いが、リタイア後の暮らしに意味なく不安をおこさせるのだろう。

お互いを尊重することの一つに、それぞれの時間と空間を確保することが大事だということがある。建築的にはそれぞれの居場所を作ることになるのだが、どうやら「沈黙さえも快い二人」であるためには、それだけではなさそうだ。共に暮らし続けるということがどういうことなのかを、先輩方のお話を聞きながら私自身考えさせられた一言があった。



西田恭子氏のプロフィール：一級建築士。「三井のリフォーム」で設計を手かけ二五年。暮らしの創造に貢献する「三井のリフォーム住生活研究所」の所長に就任。新聞・雑誌・書籍の執筆、各種セミナーで講演を行う。文化女子大学非常勤講師。日本女子大学住居学科卒。